

〈実践報告〉

Needs Analysis の観点からみた 同志社女子大学共通教育における 英語教育の特徴と教育的示唆

森 永 弘 司
池 上 久美子
松 村 延 昭

Abstract

This paper mainly reports the results and its analysis of the questionnaire research of needs analysis conducted at Doshisha Women's College in 2011. The number of participants of this research is 205 with different majors. One of the main findings of this research is that frequency of reading ability in the class is very high whereas the importance of speaking English is the highest in the field after their graduation. We also find that most students have more or less difficulty in reading English, writing English, speaking English and listening to English. It is a surprising finding that 80% of the students want to read novels as reading materials. Knowledge of vocabulary, general listening comprehension and reading quickly are the top three items they consider very important to improve their English abilities. Based on the findings of the research, we make six suggestions which we hope are of some help for making a revision of the present English curriculum.

Key words: needs analysis, the English curriculum, questionnaire research, intrinsic motivation, interaction

1. はじめに

学生の英語力を伸ばすために、大学英語の教育現場でもさまざまなカリキュラム開発がおこなわれ実施されているが、近年 TOEIC の得点を伸ばすことを目標にしたカリキュラムをもとに英語の授業をおこなう大学が増えつつある。その大きな理由の一つとして TOEIC が受験者の英語能力を測定する上で非常に信頼度が高い標準テストであることが挙げられる。例えばクラスで前期の授業前と後期の授業終了後に TOEIC を受験させることで学生の1年間の英語力の増減や、その授業の英語力を伸ばさせる上での有効性が客観的に測定できるという点がある。もう一つの大きな理由は、TOEIC の得点を重視する企業が増加してきているために、学生も TOEIC の得点を上げるための勉強せざるを得ない状況になって来ていることである。TOEIC 対策を主眼とするカリキュラムは、企業が学生に身に付けて欲しいと期待する英語力、大学が学生に身に付けて欲しいと考える英語力という大学の英語カリキュラムを策定する際の二つの要件は満たしているが、もう一つの要件である学生自身が身に付けたいと思う英語力に関しては十分に勘考されていないように思われる¹。学習者の英語の授業に対するニーズを考慮しなければ、学習者の英語学習に対する内発的動機づけを高めることはできないであろう。どの教科であれ、「馬を水のある所に連れていくことはできるが、水を飲ませることはできない」という人口に膾炙した言葉が示しているように、学習者の内発的な動機づけを高めることなしには、どんな優れたカリキュラムを実施しても期待した学習効果を達成できないであろう²。三浦（2009）は、内発的動機づけを学習者に持たせるためには、学習者と保護者が英語教育に何も求めているかに関してニーズ・アナリシスをおこなうことが必要であると述べている。氏は国レベル、教育委員会レベル、学校レベルでニーズ・アナリシスを実施し、その結果を公表し、調査結果をふまえた上で、ニーズに合わせた英語教育カリキュラムを作成することを提言している³。

三浦と同じく学習者のニーズを分析することが重要であるとする筆者は、内発的動機付けを高めるためのより良い英語カリキュラム・デザイン開発のために作成された Jack C. Richards 著 *Curriculum Development in Language Teaching*⁴ に収録されている Needs analysis questionnaire for non-English-background students を使用して同志社女子大学の学生対象にニーズ・アナリシスのアンケート調査を実施した。Richards の質問紙を使用したのは、この質問紙が英語の4技能の活用に関する詳細かつ広範な質問項目から構成されている点、また森永がこの質問紙を利用して過去に同志社大学と立命館大学で調査を実施した事があるので、両大学との比較がおこないやすいという2点による。現在多くの大学で教員と学生の双方向的なコミュニケーションによって授業改善を目指す授業評価が実施されているが、カリキュラム作成或いは改訂に際しては、双方向的なコミュニケーションは図られていないように思われる。本稿ではアンケート調査の結果にもとづき同大学の学生のニーズを分析するとともに、現在のカリキュラムが学生のニーズに十分対応しているのかの検証を試み、最後に教育的示唆を述べたい。この実践報告が今後の本学カリキュラム改善のための一助としていただければ幸いである。

2. 先行研究

ニーズ・アナリシスの必要性は、1980年代に生まれた学習者中心 (learner-centered) という考えから生まれたものである。学習者中心の提唱者である Nunan (1988) はカリキュラム作成にあたり教師と学生が相互に意見を交換することでより良いものに練り上げていくことを提案している⁵。Parkinson & O'Sullivan (1996) も同様にカリキュラム作成の際に、教師と学生が協議することの重要性を述べている⁶。また Tudor (1996) も学習者中心主義の要件の一つが学習者のニーズを含む多様性を積極的に取り入れていくことであると語っている⁷。こうした学習者中心という考えを背景に

生まれたのがニーズ・アナリシスであるといえる。教える側の教師の視点だけでなく、教えられる側の学生の視点を取り入れることで学生のモチベーションを高めることができると同時に、学習目標の達成に関して学生に責任を持たせるという効果も生み出しえる。

ニーズ・アナリシスの目的に関して Richard (2001) は (1) 学習者がどういった言語技術を必要としているかの発見、(2) 現在のコースが学生のニーズに十分に焦点をあてたものであるかの見極め、(3) グループのどの学生が、特定の言語技術を必要としているかの判断、(4) 参考となるグループの人々が重要だと感じる方向性(傾向)の変化の特定、(5) 学生が出来ることと学生が出来る必要のあることのギャップの特定、(6) 学習者が経験している特定の問題についての情報収集の6点を挙げている⁸。この6点をみたくようなニーズ・アナリシスをおこなうためには、アンケート調査のみならず、個々の学生とのインタビューやテストの分析、個々の学生の授業への取り組みを観察する必要があるであろう。ニーズ・アナリシスをおこなうことで得られた結果をどの様に活用するかに関して、Richards は次の3点を挙げている。(1) 現存するプログラムやプログラムの構成要素の一部を批評するための基礎を提供すること、(2) 将来のプログラムの計画目標や目的の基礎とすること、(3) プログラムにおける適切な教授法の選択に役立てること⁹。

ニーズ・アナリシスの対象になるのは学習者以外に (1) ディスコース・コミュニティーのニーズ、(2) 教師および大学等の教育機関のニーズが挙げられる。ディスコース・コミュニティーは学生が卒業後に加入する組織の事であるが、多くの学生が企業に就職していくケースが多いので、企業が学生に求める英語力と解釈できる。今回の研究は学生のニーズの分析に限定したものであるので、ディスコース・コミュニティーと教育機関のニーズに関しては、現在の英語教育政策の根幹となっている『『英語が使える』日本人の育成のための行動計画』は、経済政策の一環として閣議決定されたものであり、

経済政策に強い影響力を持つ経団連の主導のもとに作られたものであることを付言するに止めたい¹⁰。

今回のアンケート紙による調査は（１）学習者がどういった言語技術を必要としているかの発見、（２）現在のコースが学生のニーズに十分に焦点をあてたものであるかの見極めを主眼とし、（１）現存するプログラムやプログラムの構成要素の一部を批評するための基礎を提供する、（２）将来のプログラムの計画目標や目的の基礎とすることを意図したものである。

3. ニーズ・アナリシスのアンケート調査の参加者とカリキュラム概要

参加者は本学の人間生活学科、こども学科、社会システム学科、日本語日本文学科、医療薬学科の1年次生の総計205名である¹¹。同大学では習熟度別クラス編成は実施されていないので、各クラス内で英語習熟度の高い学生と低い学生が混在している。テキストに関してはクラス担当者が自由に選べるようになっており、統一テキストは使用されていない。大半の学生は1年次に英語購読ⅠA・ⅠBおよび英語コミュニケーションⅠA・ⅠBを、2年次に英語講読ⅡA・ⅡBおよび英語コミュニケーションⅡA・ⅡBを履修することになっている。

4. ニーズ・アナリシス調査紙のアンケート項目内容及び アンケート調査の結果とその考察

質問紙は全部で88項目の質問で構成されている。質問項目間に内的整合性（internal consistency）があるかどうかを調べるための指標であるクロンバック α （信頼性を示す係数）は0.95と極めて高い¹²。原文のままでは学生に理解しにくいものもあるので、森永が和訳した質問紙を使用した。森永の判断により、省略した質問項目も若干ある。具体的な質問項目は付録として巻末に掲載した。

次にアンケート調査の結果について述べる。数字はパーセント化して示し

た。また記入忘れおよび無回答に関しては結果から除外した。本学は習熟度別クラスを実施していないので、有意差の検定はおこなわなかった。

表 1. 4 技能の使用頻度

	非常によく使う	よく使う	時々使う	減多に使わない	全く使わない
Reading	37	41	19	3	0
Writing	11	31	42	15	1
Speaking	16	25	27	25	7
Listening	11	29	32	15	13

表 2. 4 技能の使用に苦勞する頻度

	常に	しばしば	時々	減多にない	全くない
Speaking	21	26	26	21	6
Reading	13	32	34	17	4
Writing	11	32	35	18	4
Listening	15	27	31	16	11

「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると80%近くを占めるリーディングの活用度が際立って高く、他の3技能の割合の倍近い活用度を示している。このことは英語コミュニケーションの授業でも読解力を活用する問題が多く含まれているテキストが使用されていることを示唆しているように思われる。ライティング、スピーキング、リスニングに関してはほとんど差はない。「時々使う」に関してライティングの使用頻度が高いのは、英作の課題が学期中に何回か課されることが原因ではないかと推察される。「減多にない」と「全くない」に関してはスピーキングとリスニングの割合が高く、英語コミュニケーションの授業でも口頭でのコミュニケーション能力を活用するタスクは余り実践されていないようである。使用に苦勞する頻度に関しては、

活用度とは逆にスピーキングとリスニングの頻度が高い。口頭でのコミュニケーションに苦慮している学生が多くいることが示唆されている。

表 3. クラスで良い成績を取るための英語能力の重要性の度合い

	非常に高い	高い	どちらとも言えない	やや低い	低い
Reading English	33	46	19	2	0
Writing English	18	48	27	5	2
Listening to English	10	40	31	10	9
Speaking English	12	36	32	13	7

良い成績を取るための重要度は、使用頻度とほぼ比例しており、リーディングの重要度が圧倒的に高い。ライティング力も「非常に高い」と「高い」を合わせると68%を占めるので、かなり高いといえよう。この結果も使用頻度と同様に、リーディング主体の授業が展開されていることを示しているといえよう。

表 4. 将来の仕事で成功するための英語能力の重要性の度合い

	非常に高い	高い	どちらとも言えない	やや低い	低い
Speaking English	28	32	30	5	5
Reading English	15	43	31	7	4

Listening to English	25	31	32	7	5
Writing English	11	35	41	10	3

「どちらとも言えない」の割合が高いのは、3分の1位の学生が将来就きたい職に関して、具体的なヴィジョンを持っていないことに起因するのではないかと推察される。「非常に高い」と「高い」を合わせた割合は、スピーキングが他の3技能に比して若干高いといえるが大きな差はない。因みに立命館大学の理工学部および情報理工学部の intermediate と pre-intermediate レベルの参加者総計694名を対象とした森永(2009)の調査(「より良い大学英語教育カリキュラムを作成するためのニーズ・アナリシス調査」)¹³や同志社大学の文系学部の参加者総計235名を対象とした森永(2008)の調査(「文系学部一主として法学部、経済学部、商学部一の学生を対象としたニーズ・アナリシスの試み」)¹⁴でも、4技能の重要度の割合に関しては類似の傾向が見られた。「非常に高い」と「高い」を合わせた割合は、リスニングの場合立命館大学では65%、同志社大学では67%、スピーキングは立命館大学が63%、同志社大学が64%、ライティングが立命館大学47%、同志社大学43%、リーディングが立命館大学58%、同志社大学55%であった。リスニングに関しては両大学と10%近い開きはあるが、それ以外の3技能に関しては、両大学とかなり近い数値が検出されている。同志社女子大学の場合、ライティングの重要度が少し劣るが、半数近い学生が全般的な英語力の伸長の重要性を認識しているといえよう。

表5. スピーキングの際に苦勞する頻度

	いつも	しばしば	時々	滅多にない	全くない	該当しない
自分が言いたいことを速く言う	37	35	17	5	1	5
英語でどう言えばいいかわからない	45	29	22	1	0	3
口頭で英語で発表する	28	39	21	6	1	5
英語を正しく発音する	32	31	25	9	1	2
英語のディスカッションに加わる	36	26	18	4	2	14
英語で話そうとする時、間違えないよう	23	37	20	14	3	3

スピーキングの際に苦勞する頻度は、全ての項目で高く、「いつも」、「しばしば」、「時々」を合計すると全て8割を超える。とりわけ「英語でどう言えばいいかわからない」は96%に達する。多くの学生が最も苦手とするのがスピーキングであるが、多くの日本人教員もスピーキングの指導に関しては余り時間を割くことができないので、十分なスピーキング指導がおこなえないのが現状であるかと思われる。

表6. リスニングの際に苦勞する頻度

	いつも	しばしば	時々	滅多にない	全くない	該当しない
英語で長々と説明されるのを理解する	30	24	19	8	3	16
口頭での英語の指示を理解する	23	24	22	13	2	16
コロキアルな口語表現を理解する	23	23	27	6	1	20
話の主題を理解する	22	22	24	16	2	14
講義を理解する	23	16	22	14	2	23
テキストの分かりにくい箇所を質問する	19	17	17	19	3	25
講義のノートを取る	13	13	19	24	4	27

リスニングに関して苦勞する頻度は、項目によってばらつきが見られる。「講義を理解する」、「講義のノートを取る」や「テキストの分かりにくい箇所を質問する」の項の頻度が低いのは、英語講読と英語コミュニケーションを共に日本人教員から習っている学生の場合該当しない場合が多いからだと思われる。これ以外の項目に関しては全て7割前後で苦勞する頻度も高いといえる。

表7. ライティングの課題作成の際の重要度

	とても高い	高い	そんなに 高くない	わからない
自分の考えを明確に表現する	42	46	9	3
自分の考えを適切に表現する	35	49	13	3
自分の考えを展開する	28	53	16	3
全般的英作の力	34	47	14	5
スペルを正しく書く	22	57	19	2
正しい文構造で書く	28	51	18	3
期限までに課題を提出する	43	33	20	4
適切な単語を使う	21	53	24	2
パラグラフの構成	21	52	22	5
正しく句読点を打つ	15	43	39	3

表8. ライティングの課題作成の際の困難さの頻度

	頻繁に	時々	全くない	わからない
自分の考えを適切に表現する	45	44	8	3
自分の考えを明確に表現する	42	46	9	3
全般的英作の力	47	41	9	3
自分の考えを展開する	45	43	8	4
正しい文構造で書く	37	50	9	4

適切な単語を使う	34	49	12	5
スペルを正しく書く	31	51	14	4
パラグラフの構成	30	47	14	9
正しく句読点を打つ	15	61	19	5
期限までに課題を提出する	24	43	28	5

ライティング課題作成の際の重要度に関しては、「頻繁に」と「時々」を合わせると、「正しく句読点を打つ」(58%)を除けば、他の項目は全て70%を超えており高いといえる。「自分の考えを適切に表現する」(84%)、「自分の考えを明確に表現する」(88%)、「全般的な英作の力」(81%)は80%を超えており、この事から自分が言いたいことのニュアンスを簡潔かつ的確に伝えることのできる英語での表現力を最重要視していることがわかる。課題作成に苦勞する頻度に関しては、「期限までに課題を提出する」を除けば、全て重要度より高い数値が検出されている。重要度同様「自分の考えを適切に表現する」(89%)、「自分の考えを明確に表現する」(88%)、「全般的な英作の力」(88%)が高い割合を示している。

表9. リーディングの時に読みたい題材

	読みたい		読みたい
小説	81	実験の説明記事	28
雑誌の記事	80	コンピューターを使って読む記事	25
本の抜粋	56	専門の論文	23
新聞記事	54		

表10. 上記の題材を読む際の困難度の頻度

	しばしば	時々	全くない
専門の論文	83	13	4
実験の説明記事	78	19	3
コンピューターを使って読む記事	69	27	4
新聞記事	65	32	3
本の抜粋	55	41	4
小説	48	48	4
雑誌の記事	47	49	4

近年教育現場で使用されることが益々減ってきている「小説」の人気度が一番高いことが注目される。小説の人気度は高く前出の同志社大学文系学部の調査でも67%、立命館大学理系学部の場合でも55%あった⁷。反対に不人気であったのが、「専門の論文」や「実験の説明記事」CALLのような「コンピューターを使って読む記事」であった。小説が人気があるのは、身近で感情移入し易いストーリー性のある題材を読みたいという学生の希望に起因していると思われる。題材の困難度に関しては、人気の高い「小説」や「雑誌の記事」は低く、不人気な「専門の論文」、「実験の説明記事」や「コンピューターを使って読む記事」は高い。

表11. リーディングの際の困難さの頻度

	いつも	頻繁に	時々	まれに	全くない
専門用語を理解する	28	33	28	10	1
未知の単語を文脈から推測する	27	32	29	10	2

速く読んで大意を理解する	29	28	32	11	0
速く読む	25	32	34	6	3
速く読んで特定の情報を探し出せる	24	31	31	13	1
批判的に読む	22	32	28	13	5
テキストの構成を理解する	18	32	39	10	1
著者の立場や意図を理解する	19	31	38	9	3
ゆっくり読んで、細部を理解する	13	33	38	15	1
テキストの主題の理解	15	27	41	14	3

リーディングの際の困難さの頻度に関しては、「いつも」と「頻繁に」を合わせた場合、「テキストの主題の理解」と「ゆっくり読んで、細部を理解する」を除くと、全ての項目が50%を超えている。授業に占めるリーディングの比重はかなり大きいので、リーディング力の伸長も見られると思われるが、学生はリーディングの技法の習熟にかなり苦労しているようである。その原因としては、使用されるテキストの難度が高いことと読む英文の量が多いことが考えられる。

表12. 全般的な英語力向上のための重要度

	非常に高い	高い	どちらともいえない	やや低い	低い
語彙力の増強	49	38	11	1	1

全般的なリスニング力	48	39	9	3	1
速読の力	44	39	12	3	2
スピーチやプレゼンをおこなう力	40	38	18	2	2
教員と教室の内外で英語で上手くコミュニケーションをとる力	32	45	18	3	2
自由英作文が書ける力	32	44	17	4	3
英語でのディスカッションに参加できる力	37	37	21	3	2
発音、イントネーション、ストレスを聴き分ける力	28	43	23	4	2
友人との共同プロジェクトを英語でおこなう力	22	42	30	5	1
英語で実験報告書を書ける力	19	32	37	9	3
英語でエッセーを書ける力	16	26	43	10	5
英語でおこなわれる講義でノートを取る	10	31	46	10	3
批判的に読む力	11	31	46	10	2

全般的な英語力向上のための重要度に関しては、1位が「全般的なリスニング力」(87%)と「語彙力の増強」(87%)で、3位が「速読の力」であった。因みに同志社大学の場合は、1位が「全般的なリスニング力」(74%)、2位が「語彙力の増強」(68%)、3位が「英語でフィクションが書ける力」(67%)、立命館大学の場合は、1位が「友人との共同プロジェクトを英語でおこなう力」(82%)、2位が「全般的なリスニング力」(81%)、3位が「語

彙力の増強」(76%)であった¹⁵。

表13. 授業改善のため実施したほうがよいこと

事 項	賛 成
テキスト以外の資料の配布を増やす	28
読解の教材に関しては、サマリーを配布して欲しい	26
教材を易しくする	22
もっと多肢選択の問題を増やす	19
担当の教員に個人的に教えてもらう時間を設けて欲しい	16
リーディングの分量を減らして欲しい	13
授業でもっとパワーポイントを使用したほうがいい	13
グループワークやペアワークを減らす	11

教材を易しくして欲しいという要望が5分の1強の学生からあり、またサマリー(本文の和訳と考えられる)や補助資料の要望が4分の1強の学生からあったので、この3点に関してはある程度の配慮が望まれる。

5. アンケート結果を踏まえた授業改善のための教育的示唆

(1) 英語購読の授業を精読と速読を組み合わせる

現在のリーディングの授業は *skimming*, *scanning*, *vocabulary in context* 等の読解方略の技法を身に付けさせることで、比較的平易な英文を多く読むことが主流になってきている。しかしながら読解力の習熟度が低い学生の場合、問題の解答の鍵になるセンテンスを *skimming* や *scanning* で見つけ出せても、そのキーセンテンスの意味をきちんと把握できない場合、勘やフィーリングに頼って誤読するケースが増えてきている。速読の前提としてきちんとした精読力を身に付けさせる必要がある。森永(2011)の調査では学生の精読力の重要性に対する認識は高く、必修あるいは選択制での精

読の授業の開講の必要性に対するニーズも高い¹⁶。従って、英語講読の春学期に精読の授業、秋学期には速読の授業（担当者の判断で逆でも可）をおこなうことが望まれる。精読の授業の題材として学生に人気のある小説を組み込めば学生のモチベーションを高める上で効果的である。

（２）スピーキング活動をできるだけ多く授業に取り入れる

スピーキングの授業での活用度は一番低いが、将来の仕事で成功する英語の能力の重要度では学生の認識が一番高い。従って授業でのスピーキング活動を増やす必要がある。ネイティブの講師の数を増やすことも一計であるが、授業で英語のプレゼンテーションを多くおこなうことが効果的である。プレゼンの技法は、学生が卒業後どんな分野に進んでも非常に重視されるスキルである。またプレゼンをおこなうためには、最初に原稿を書く必要がある。そうすると英作文の練習にもなるし、パワーポイントを使用しておこなえば、音声、映像、動画の取り込み、アニメーションの作成等の *computer literacy* の強化にも繋がる。

（３）e-learning のプログラムを授業に組み込む

リスニング上達の要諦は、個々人の聴解力に合わせてできるだけ多くの英語を聴きとる練習を重ねる所にある。そのためには授業でのリスニング練習だけでは十分とはいえない。現在ネット上に無料のリスニングのサイトが多く存在するが、学生にそうしたサイトを紹介し聴解力を伸ばすことを勧めても、実行する学生はほとんどいない。従って学外からもアクセスできるリスニングを中心とした e-learning プログラムを授業に導入し、授業成績評価の 2～3 割程度をこのプログラムに割り振ることが望ましい。

（４）語彙力増強のための施策

語彙力は全般的な英語力を強化する上で学生が最も重視しているものの一つである。語彙力は 4 技能の根幹をなすものなので、授業の際には語彙力を伸長させる施策をおこなう必要がある。単語テストを頻繁に実施したり、受容語彙数や発表語彙数を測定するテストをおこなったりすることで、学生の

語彙力増強に対するモチベーションを高めることが肝要である。上記の e-learning プログラムの中に語彙力増強のプログラムを導入することも効果的である。

(5) 2年次生の授業の選択化

学生の英語に対するニーズも多様化してきているので、そうしたニーズに応えるために2年次生の授業を選択化することが望ましく考えられる。各クラス間の受講者数の調整に関しては苦勞するかもしれないが、例えば2年次ではリーディング、スピーキング、リスニング、ライティング、CALL、TOEIC 或いは TOEFL 対策等の授業を設定し、学生に選択必修のかたちで履修させれば、学生のニーズに応えることができる。

(6) 文法指導の導入

文法指導の導入は、アンケート調査とは全く別個に私案として提言させていただいたものである。先日開催された英語嘱託講師懇談会（2012年3月12日開催）の席上で英語英文学科教務主任から2013年度以降の英語の授業の試案が配布された。その内容は「2013年以降は英語講読A・Bはともに60分はテキストの講読、30分は TOEIC 演習として授業する」というものである。あえて私見を述べさせていただけば、TOEIC 演習ではリーディングやリスニングの演習をおこなうのではなく、文法の演習を中心におこなうことが望ましい。というのはリーディングやリスニングの問題よりも文法問題の方が、こなした量が得点に反映される場合が多いからである。また文法力は語彙力と並んで4技能の根幹を成すものであり、森永（2010）の研究でも文法力が受容語彙とは強い相関性が、読解力および英語の総合力とも中程度の相関性があることが判明しており、全般的な英語力の伸長に重要な役割を果たしているからである¹⁷。

以上の提言の中には同志社女子大学の英語教育におけるカリキュラム作成時の理念に通じていない所から発想された空理空論に近い提言もあるかもしれない。しかし冒頭で述べたように筆者は教員と学生の双方向的な授業評価

だけではなく、理想的には学生がカリキュラムに対してどのようなニーズを抱いているか調査し、教員がそうしたニーズをできるだけ汲み取ることで学生の学習意欲を高めることを試みる双方向的なカリキュラム評価が実施される必要があると考えている。今回の本学の学生を対象にしたニーズ・アナリシスアンケート紙調査が、本学の英語カリキュラム再編の際少しでも参考になる点があることを願って本稿の結びとしたい。

付録

「授業改善のためのアンケート調査」

A. 1. 現在履修している英語のクラスで、次の4技能（a. Reading b. Writing c. Speaking d. Listening）の使用頻度について、当てはまるもの（1. 非常によく使う 2. よく使う 3. 時々使う 4. 滅多に使わない 5. 全く使わない）にマルをしてください。

A. 2. 現在履修している英語のクラスで、上記4技能に関して、使用に苦勞する頻度について、当てはまるもの（1. 非常に苦勞する 2. しばしば苦勞する 3. 時々苦勞する 4. 滅多に苦勞しない 5. 全く苦勞しない）にマルをしてください。

B. 1. 現在履修している英語のクラスで、良い成績を取るための英語能力（a. Listening to English b. Speaking English c. Writing English d. Reading）の重要性の度合について、当てはまるもの（1. 非常に高い 2. 高い 3. どちらともいえない 4. やや低い 5. 低い）にマルをしてください。

B. 2. 大学卒業後、自分が将来就きたいと思う仕事で成功するための上記英語能力の重要度に関して、当てはまるもの（1. 非常に高い 2. 高い

3. どちらともいえない 4. やや低い 5. 低い) にマルをしてください。

C.スピーキングに関して、次の a から f の事柄がどれ位の頻度で起こるか、当てはまるもの (1. いつも 2. しばしば 3. 時々 4. 滅多にない 5. 全くない 6. 該当しない) にマルをしてください。

a. 口頭で英語で発表する時苦勞する b. 自分が言いたいことを速く言おうとする時苦勞する c. 英語で話そうとする時、間違えてはいけな
いと思
い苦勞する d. 英語でどうい
えばいいの
か分から
ないので
苦勞する e. 英語の正しい発音で苦勞する f. 英語のディスカッションに加わるのに苦勞する

D.リスニングに関して、次の a から g の事柄がどれ位の頻度で起こるか、当てはまるもの (1. いつも 2. しばしば 3. 時々 4. 滅多にない 5. 全くない 6. 該当しない) にマルをしてください。

a. 英語でおこなわれる講義を理解するのに苦勞する b. 英語でおこな
われる講義のノートを取るのに苦勞する c. 授業で使用しているテキストの
分りにくい箇所を英語で質問するのに苦勞する d. 英語で長々と説明さ
れると理解するのに苦勞する e. 口頭での英語の指示を理解するのに苦勞
する f. コロキアルな会話表現を理解するのに苦勞する g. 何が話され
ているのか、話の主題を理解するのに苦勞する

E.ライティングの課題を出された時に、次の a から j の技能がどれ位重要だと思
いますか。又この技能の使用に関して、どれ位の頻度で難しさを感じ
ますか。当てはまるもの (重要度: 1. とても高い 2. 高い 3. そんな
に高くない 4. 分からない)、(頻度: 1. 頻繁に 2. 時々 3. 全くない 4. 分からない) にマルをしてください。

a. 正しく句読点を打つこと b. スペルを正しく書くこと c. 正しい文

構造で書くこと d. 適切な単語を使用すること e. パラグラフの構成
f. 自分の考えを適切に表現すること g. 自分の考えを展開すること h.
自分の言いたいことを、明確に表現すること i. 提出期限までに、ライテ
ィングの課題を提出すること j. 全般的なライティングの力

F. 1. リーディングの授業で読みたいと思う題材の種類と、今までこうし
た題材を読んだ時に難しさを感じる頻度に関して、当てはまるもの (1. 読
みたい 2. 読みたくない)、(頻度: 1. しばしば 2. 時々 3. 全くな
い) にマルをしてください。

a. 雑誌の記事 b. 新聞記事 c. 小説 d. 専門の論文 e. 本の抜粋
f. 実験の説明記事 g. コンピューターを使って読む記事 (CALL でのリー
ディングの授業)

F. 2. リーディングの時に、あなたが経験する次の a から j の事柄の頻度
に関して、当てはまるもの (1. いつも 2. 頻繁に 3. 時々 4. まれ
に 5. 全くない) にマルをしてください。

a. テキストの主題を理解する b. 素早く読んで、文章の大意を理解する
c. ゆっくり読んで、文章の細部を理解する d. 素早く読んで、特定の情
報のある箇所を捜すことができる e. 未知の語を、文脈から推測できる
f. テキストの構成を理解できる g. テキストで使われている専門用語を
理解できる h. 速く読むことができる i. 批判的に読むことができる j.
著者の立場や意図を理解できる

G. あなたが自分の英語能力を向上させたいと思った時、次の a から l の事
柄の重要度に関して、当てはまるもの (1. 非常に高い 2. 高い 3. ど
ちらともいえない 4. やや低い 5. 低い) にマルを付けてください。

a. 英語の発音、イントネーション、ストレスを聞き分ける力 b. 英語で

おこなわれる授業でノートを取る力 c. 全般的なリスニング力 d. スピーチやプレゼンテーションをおこなう力 e. 英語でのディスカッションに参加できる力 f. 友人との共同のプロジェクトを英語でおこなうことのできる力 g. 教員と教室の内外で英語でうまくコミュニケーションをとる力 h. 英語でエッセーを書く力 i. 英語で実験報告書を書く力 j. 英語でフィクションが書ける力 k. 語彙力の増強 l. 速読の力

H. 資格取得対策講座のような授業外の講座で、英語の勉強をした経験がありますか。はいと答えた人は、その講座名と、その講座が自分の英語力を伸ばす上でどれ位役にたったかに関して、当てはまるもの（1. とても役にたった 2. 少しは役にたった 3. どちらともいえない 4. 少しは役にたった 5. 全く役にたたなかった）にマルをしてください。

I. 英語の授業改善のためにおこなった方がいいと思われるものに、マルをしてください。

- (1) 授業でもっとパワーポイントを使用したほうが良い
- (2) 教材をやさしくする
- (3) グループワークやペアワークを減らす
- (4) テキスト以外の資料の配布を増やす
- (5) テストやクイズでもっとマルチプル・チョイス（多肢選択問題）の数を増やす
- (6) 読解の教材に関しては、サマリーを配布して欲しい
- (7) リーディングの分量を減らして欲しい
- (8) 担当教員に個人的に教えてもらう時間を設けて欲しい

謝辞

本稿の草稿に関して修正のための詳細かつ有益なコメントをいただいた査

読委員の先生にお礼申し上げます。

注

- 1 詳しくは『応用言語学辞典』の「ニーズ・アナリシス」107-108の項を参照されたい。
- 2 内発的動機付け (intrinsic motivation) は、外発的動機付け (extrinsic motivation) ペアで1985年に Deci と Ryan によって提唱された第二言語学習の動機付け理論である。R. C. Gardner の提唱した道具的動機付け (instrumental motivation) と統合的動機付け (integrative motivation) と並んで、第二言語学習の動機付け理論としてよく知られている言葉である。内発的動機付けを高める具体的なストラテジーに関しては、森永弘司 (2009b)、「外国語学習意欲を高めるストラテジーを求めて—Dörnyei の提唱する Motivational Strategies を利用したアンケート調査にもとづく—」『立命館高等教育研究』、9 : 195-210. を参照されたい。
- 3 三浦孝、大津由紀雄編著。(2009).『危機に立つ日本の英語教育』157
- 4 Richards, J. C. (2001). *Curriculum Development in Language Teaching*, Cambridge: Cambridge University Press, 80-88. 先行研究執筆に際して、奥村玲香 (2010). を参考にさせていただいた。
- 5 Nunan, D. (1988). *The learner-centered curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press, 2.
- 6 Parkinson, L. & O'sullivan, K. (1996). Negotiating the learner-centered curriculum. *Teachers as Course Developers: teachers as course developers*. Graves, K. (Ed). 112-127. New York: Cambridge University Press.
- 7 Tudor, I. (1996). *Learner-centredness as Language Education*. Cambridge: Cambridge University Press, 29.
- 8 Richards, 前掲書、52.
- 9 上掲書、52.
- 10 水野稚 (2008). 「経団連と『英語が使える』日本人」『英語教育』57 (1) : 65-67. 水野は同論文の中で「経済政策の決定に強い影響力を持つ経団連が「提言」という形で、経済界の視点から英語教育への要望を政府に対してアピールしたことなどから、文科省としては経団連の主張を「丸呑み」せざるを得ないという状況に置かれていた可能性があるだろう」と述べている。また氏は「「なんとなく」という感覚で、英語教育を専門としない人たちが、その経済的影響力だけで英語教育を揺るがしている今日の状況はどう考えても不健康である」と今日の英語教

- 育に警鐘を鳴らしている。
- 11 より精緻かつ精度の高いデータを得るためには、英米文学及び英語教育という学習目標がはっきりしている英文学科以外の全ての学科の参加者を対象としたアンケートが必要といえるであろう。これは今後の課題とし、専任・嘱託の諸先生方のご協力を得られれば、全学的なアンケート調査を行いたいと思う。
 - 12 クロンバック α は信頼度を示す数値であるが、信頼度が高いとは、このアンケート調査紙を同じ参加者を対象に一定の間隔をおいて複数回実施しても同じような結果が一貫して得られることを示している。
 - 13 森永弘司・佐藤香苗 (2009a). 「より良い大学英語教育カリキュラムを作成するためのニーズ・アナリシス調査」 第35回全国英語教育学会鳥取研究大会予稿集 147-148を参照されたい。
 - 14 森永弘司・前田悦子 (2008b). 「文系学部一主として法学部、経済学部、商学部一の学生を対象としたニーズ・アナリシスの試み」 外国語教育メディア学会2008年度関西支部秋季大会。
 - 15 語彙力増強の重要性に関しては、2つの大学の学生の受容語彙数、発表語彙数、語知識の深さの3つの語彙力構成要素と読解力および聴解力との間の相関性から、語彙力を伸ばすことの重要性を論じた森永 (2008c). 「語彙力増強の重要性—二つの大学の語彙力測定テストのデータに基づく—」を参照されたい。
 - 16 森永弘司 (2011). 「精読法授業開講の必要性—教養課程で必修及び選択の授業での精読法授業の試み—」『同志社大学教育開発センター年報 第2号』49-62を参照されたい。
 - 17 森永弘司・竹村理世 (2010b). 「文法指導の重要性—Vocabulary Levels Test, Productive Levels Test, C-test, 読解力テストおよび聴解力テストとの相関性の観点からの考察—」第36回全国英語教育学会大阪研究大会発表予稿集 194-195を参照されたい。

引用・参考文献

- 小池生夫他 (2003). 『応用言語学辞典』東京：研究社。
- 奥村玲香 (2010). 「学習者中心主義とニーズ分析—新入生の英語力の考察とカリキュラムデザイン」『人間環境科学』Vol.19. 帝塚山大学人間環境科学研究所。
- 白畑知彦、富田祐一、村野井仁、若林茂則著 (2009) 『英語教育用語辞典』東京：大修館書店。
- 菅原克也 (2011). 『英語と日本語のあいだ』東京：講談社。
- 鳥飼久美子 (2010). 『「英語公用語」は何が問題か』東京：角川書店
- 水野稚 (2008). 「経団連と『英語が使える』日本人」『英語教育』57 (1) : 65-67.

- 三浦孝、大津由紀雄編著 (2009). 『危機に立つ日本の英語教育』 東京：慶応大学出版会.
- 森永弘司・佐藤香苗 (2008a). 「理系のリメディアル・レベルの学生における英語のニーズ・アナリシスの一事例研究」 日本リメディアル教育学会第4回全国大会発表予稿集 13-14.
- 森永弘司・前田悦子 (2008b). 「文系学部一主として法学部、経済学部、商学部一の学生を対象としたニーズ・アナリシスの試み」 外国語教育メディア学会2008年度関西支部秋季大会.
- 森永弘司 (2008c). 「語彙力増強の重要性—二つの大学の語彙力測定テストのデータに基づく—」 同志社大学英文学会『主流』70. 85-105.
- 森永弘司・佐藤香苗 (2009a). 「より良い大学英語教育カリキュラムを作成するためのニーズ・アナリシス調査」 第35回全国英語教育学会鳥取研究大会予稿集 147-148
- 森永弘司 (2009b). 「外国語学習意欲を高めるストラテジーを求めて— Dörnyei の提唱する Motivational Strategies を利用したアンケート調査にもとづく—」 『立命館高等教育研究』. 9、195-210.
- 森永弘司 (2010a). 「よりよい大学英語カリキュラムを作成するための質問紙を利用したニーズ・アナリシス調査」 『同志社大学教育開発センター年報 第1号』 3-15.
- 森永弘司・竹村理世 (2010b). 「文法指導の重要性— Vocabulary Levels Test, Productive Levels Test, C-test, 読解力テストおよび聴解力テストとの関連性の観点からの考察—」 第36回全国英語教育学会大阪研究大会発表予稿集 194-195
- 森永弘司 (2011). 「精読法授業開講の必要性—教養課程で必修及び選択の授業での精読法授業の試み—」 『同志社大学教育開発センター年報 第2号』 49-62.
- Morinaga, K. (2009). Reliability of C-Test as a Device Measuring Reading and Listening Abilities. JACET 48th Annual Convention Proceedings. 199-200
- Nunan, D. (1988). *The learner-centered curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press
- Parkinson, L. & O'sullivan, K. (1996), Negotiating the learner-centered curriculum. *Teachers as Course Developers: teachers as course developers*. Graves, K. (Ed). New York: Cambridge University Press.
- Richards, J. C. (2001). *Curriculum Development in Language Teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.